

新技術で、積もらせない雪対策



昨年11月、サルナート武道館前の歩道に放熱パイプを埋設。



完成した機械制御室。ヒートポンプを併用して、更に融雪を促進することが可能。

再生可能エネルギーを活用

本市では、平成23年度から環境整備課内に雪対策・新エネルギー推進室を設置し、再生可能エネルギーの活用と雪対策について総合的な取り組みを行っています。

なかでも雪対策として注目されているのは、地中熱を利用した融雪装置です。これは、同室が山形大学大学院の横山孝男研究室の学術支援のもと実施しているもので、冬でも一定の温度を持つ地下水の熱を、不凍液を循環させて採熱し、地上の融雪に使うものです。

地下水を汲み上げて散水するシステムは以前からありましたが、汲み過ぎれば地盤沈下等を引き起こし、環境に与える影響

サルナートに地中融雪装置

サルナートに設置が進められていた、地中熱を活用した融雪システムが1月末に完成し、現在、稼働を始めています。

敷地内の武道館脇に、地中熱を取り出す深さ10m程度の浅井戸7本が掘られ、熱はサルナートの屋根部分と敷地内の歩道の融雪に活かされます。また、歩道には融雪効果を更に高めるために、ヒートポンプを併用しており、地中熱を効果的に加温することに、本市の豪雪に対応できるよう工夫されています。

水量確保が課題の流雪溝



今年度完成した若葉町の流雪溝。



1月下旬、豊かな水を蓄える新鶴子ダム。

流雪溝 水量が課題

流雪溝は現在、各地区で計画的に整備が進んでおり、整備された地域の方々に好評をいただいています。以前から、水量の確保が課題となっていました。水量が多くなれば、投雪がスムーズに行われるほか、水上がりや流れないなどのトラブルは減少します。

しかし、冬期間は湯水期とあって、これまで、なかなかまとまった水源を得ることが難しい状況にありました。

また、今後流雪溝を整備拡大するためにも、水の確保が大きな課題と言えます。

ダムの水を効果的に利用

新鶴子ダムは農業用の灌漑ダ

ムであり、代掻きの始まる5月上旬から多くの水を必要とするため、冬期間は水を蓄えています。しかし、ひとたび豪雨が発生すれば融雪時期と重なり重大な災害になりかねません。そこで、市や土地改良区では計画的に放水を行うことで農業施設を守るほか、その水を流雪溝に利用できないか検討してきました。今年度は更に計画的な水利用を目指し、農政局等関係機関と協議を重ね、現在、その効果が表れています。

限りある水資源を有効に活用するためには流雪溝のマナーを守る必要があります。正しい使用は事故を防ぐことにもつながります。中網を開けての投雪や機械による投雪、ゴミの投げ捨てはやめましょう。

絆で結ぶ、除雪ボランティアの輪



岩沼市から参加した除雪ボランティアの皆さん。窓部分の雪を掘り、家の中に久しぶりに光が射す（1月25日）。



一般参加と、弘前学院大学のボランティアの皆さん。作業の合間のひと休みに、大雪の中へ一斉にダイビング（1月25日）。



くまモンの訪問に児童たちは大はしゃぎ。活動が楽しく進んだ（2月6日）。

「おばね雪ほり隊」にやる高齢者宅の除雪

1月下旬、例年より穏やかな天候が続き、降雪量も少なく推移していますが、それでも市内には、多くの積雪があります。除雪作業は重労働であり、特に高齢者にとっては大変な作業です。

一人暮らしの高齢者宅を除雪するため、尾花沢市除雪ボランティアセンターの呼びかけで市内外から集まった「おばね雪ほり隊」が昨年度から活動しています。

今年の活動初日となった1月24日は尾花沢中学校の2年生が13戸を、25日は県内の大学生や、宮城県岩沼市の方々、遠くは青森県の弘前学院大学の皆さんな

どが8戸を除雪しました。参加者は最初に、安全に除雪するための講習を受けて、装備を再点検。その後、各班に分かれ、尾花沢市建設業協会の皆さんによる指導のもと、民生委員さんらと一緒に除雪にあたりました。

参加者のなかには除雪作業をしたことがない方も多く、スコップによる作業に戸惑っていましたが、次第にコツをつかみ、熱の入った除雪を行っていました。

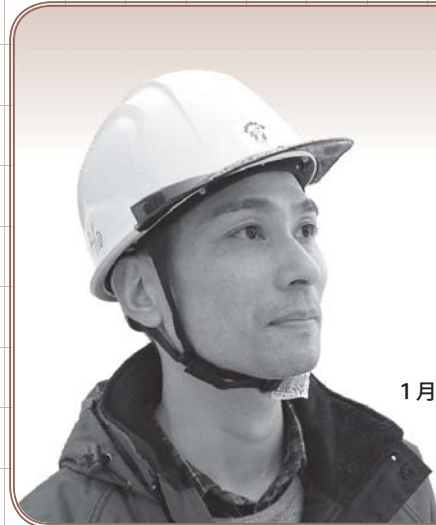
また、訪問を受けた高齢者の方々は、作業の合間に大勢のボランティアの皆さんと談笑したり、お茶菓子を食べたりして、交流を喜んでいました。

広がる除雪ボランティアの輪

本市における除雪ボランティアの取り組みは、市外にも浸透しています。

岩沼市社会福祉協議会の青山奈保美さんは、「岩沼市は、東日本大震災発生後、尾花沢市から多くの支援を受けたため、恩返し気持ちで参加した方が多い。また、ボランティア活動をきっかけに、尾花沢市の観光に興味を持つ方も増えている」と語っていました。

また、2月6日には熊本県のPRキャラクター「くまモン」が宮沢地区を訪れ、宮沢小学校6年生の皆さんと一緒に除雪を行うなど、県を越えた参加の輪が広がっています。



地域と世代を越えた交流が生まれている

私は除雪ボランティアを通じた「共助のまちづくり」を研究しています。今回はゼミの学生3人と尾花沢にやってきました。

市内の一般の成人だけではなく、中学生や、他の人たちにも参加をいただく尾花沢の取り組みは、私のいる青森県では例を見ない素晴らしい取り組みです。地域間交流の一環としても、大きく機能していると思います。

1月24、25日の除雪ボランティアに参加された
弘前学院大学 社会福祉学部
准教授 高橋 和幸氏